藤四郎が法名なり、二代目の藤四郎作を眞中古物といふ、藤四郎作と唱るは二代めをさす也、元祖を古瀬戸と稱し、二代目を藤四郎と稱するは、同名二人つゞきたる故、混せざるために唱分たるなり、藤四郎春慶も二代めなり、三代め藤次郎、是を中古物といふ、金華山窯の作者なり、四代め藤三郎、是をも中古物といふ、破風窯の作者なり、黄薬といふも破風窯より出たるものなり、正信春慶といふものあり、正信は何人なる事を詳にせず、又後時代春慶と稱するは、堺春慶、吉野春慶なり、後窯と稱するは、坊主手、宗伯、正意、山道、茶臼屋、源十郎、姉利休、鳴見、織部、捻貫、八ツ橋、伊勢手、萬右衛門等なり、又遠州公時代に新兵衛、江存、茂右衛門、吉兵衛等あり、其外國燒と唱るものは、薩摩、高取、肥後、丹波、膳所、唐津、備前、伊賀、信樂、御室なり、祖母懐は美濃の國燒なり、大窯物といふは瀬戸なれども、至て後のものにて、漸百年餘りになるもの也、右後窯以下國燒にも遠州名物數多し、〇中略

于時天明丁未〇七年之孟春

〔茶道要錄上主法〕茶盛之事

茶盛ハ其形ニ因テ勝劣アリ、肩衝ヲ一番トシ、文林二番、丸壺三番、尻豐四番、茄子五番、棗肩衝六番、鶴首七番、角木八番、矢頭九番、飯銅十番ナリ、

右ノ形ノ外ハ、縦古キ物又ハ唐物タリト云共難用之、芋子ノ類强チニ不用、右ノ内タリト云共、猶又恰合ニ因テ善惡有ベシ、先第一ニ鈍遲ヲ嫌フ、新物ノ内ニモ用ラルヽ道具有ベシ、心得肝要也、

一蓋之事、面白玉堂ト云アリ、是ハ肩衝ニ用、大茶盛ニ面白、小茶盛ニ玉堂ヲ用、落込蓋ト云有、二三六七八九番ノ六ツニ用之、瓶子ヅクト云ハ、四五番ニ用、勢ノ長大ナルニハ栄螺蓋ヲ用、同矮少ナルニ瓶子ヅクヲ用ユ、飯銅ニハ象牙ノ平蓋、中ヲ銀ノ金物ニテ鉸具ニスル也、蓋ノ取ヤウニ傳アリ、棗肩衝ニ面白ヲ用ル事有、尤恰合ニ因テ也、